

1954年制作イヴニング・ドレスの造形研究 —ビュスティエの造形技術—

A Study of an Evening-Dress Made in 1954:
Focusing on the Bustier

安部 智子 水野 真由美 森 淳子 設水 彩加 平野 紗江 齋藤 良子
ABE, Tomoko MIZUNO, Mayumi MORI, Junko SHIMIZU, Ayaka HIRANO, Sae SAITO, Ryoko

I はじめに

ゴールデン・エイジとも呼ばれ現代のファッションに大きな影響を与えた1950年代のオートクチュールは、多くのデザイナーが「形を作る」ために工夫を凝らし、様々なクリエーションを発表した。筆者らは、制作に迷った時に参照できる技術面の記録の蓄積を目的として、これらの制作技術を分析し、文書化・図式化を行っている。2014年よりクリスチャン・ディオールとクリストバル・バレンシアガのデイ・ドレスを実物資料として調査を行い、その制作技術の技法研究を行った^{1)~3)}。その結果、当時の制作技術における多くの知見と制作メゾンによる制作技術の違い、彼らのクリエーションに対する意識の違いを知ることとなった。

本研究は、ディオール社のイヴニング・ドレス（1954年制作 杉野学園所蔵）を資料とした制作技術の調査とその検証を行い、さらなる記録の蓄積を行う

ことを目的とする。また、その制作技術を現在において活用する方法の可能性について検討を行う。

I-1 クリスチャン・ディオール（Christian Dior）のイヴニング・ドレスについて

図解服飾用語事典⁴⁾においてイヴニング・ドレス（Evening dress）は「夜の正式な装いで、夜会服ともいわれ、夜のパーティや観劇などに着用される。肩や背や胸が大きくくられ、正式なものは袖をつけないことが原則とされている。」と定義されている。クリスチャン・ディオールはデビューコレクション（1947年春夏コレクション）以来、コレクションごとに200着以上の作品を発表し続けた^{5)~7)}。発表された作品の中にはデイ・ドレスやスーツ、コート、カクテル・ドレスと共に数多くのイヴニング・ドレスが含まれていた。第二次世界大戦からの復興を印象付けるように発表されたイヴニング・ドレスの中には、人々の記憶



図1 1947年春夏



図2 1950年春夏



図3 1954年春夏



図4 1957年秋冬

に深く刻まれ、多くの人に愛された作品も数多く存在する。クリスチャン・ディオールがデザインした1947年春夏コレクション～1957年秋冬コレクションにおい

て発表されたイヴニング・ドレス作品は図1～4のようになっている。

Ⅱ 調査

今回調査を行った資料は、以下の Dior 社製イヴニング・ドレス（1954年制作 杉野学園所蔵）（図5～7）である。



図5 資料正面



図6 資料側面



図7 資料背面

Ⅱ－1 調査方法について

資料の調査は、2014年度に行った「パリ・モードにおける服飾造形研究」の調査方法⁸⁾に準じて行った。

1) 外観についての調査

資料を詳細に写真撮影し、外観（構造・デザイン・シルエット・その他）の調査を行い記録した。

2) パターンについての調査

資料の計測は上前となる右身頃を計測の基準とし、必要に応じて左身頃の計測を行い記録した。

計測道具：定規・メジャー・レーヨン紙・シルク糸（＃100）・手縫い針（＃12Sharp）・シルクピン・シーチング。

3) 縫製方法についての調査

資料を詳細に写真撮影し、計測・縫製方法の調査を行い記録した。

4) 素材についての調査

資料の素材について調査を行い記録した。

Ⅱ－2 調査結果と考察

資料（図5～7）の調査結果は以下の通りである。

Ⅱ－2－1) 外観についての調査

構造：ストラップなしの身頃と3段のプリーツが裾に向かい広がったシルエットのスカートで構成されたワンピース・ドレススタイルのイヴニング・ドレスである。身頃の裏側にはビュスティエが、スカートのプリーツの裏側には土台となるスカートが内蔵されている。資料の後ろ中心に作られた明きは、身頃部分はファスナー、スカート部分はスプリングホックとスナップが付いている。スカートのレース部分が透けて内部が見えることから、本来はペティコートと共に着用されていたものと考えられる。

デザイン：ストラップレス・ネックライン⁹⁾のすっきりした身頃と3段のプリーツが配置されたたつぷりと広がったスカート、レースをネックラインとスカート（2箇所）に配置し、華やかな夜の装いとなっている。シルエット：バストからウエストまでは着用者の体に沿い、ウエストからスカートの裾に向かい、たつぷりと広がったサーキュラスカートのシルエットを形成している。上半身が着用者の体にフィットし、豊かなバストが女性特有のシルエットを現している。

破損・劣化・欠損：右バストポイント(図8)とスカート明き止り位置の生地劣化(図9)、ビュスティエに付けられたボーンの破損(図10)、ボーンテープや糸のほつれなど(図11)、経年による劣化が細かい部分に見られる。その他特に目立った欠損は無い。



図8 右バストポイントの生地劣化



図9 明き止り部分の生地劣化



図10 ボーンの破損



図11 ボーンテープの劣化

変更箇所：なし。

グリフ：ビュスティエ内側、左脇線上（ネックラインより8.4cm 下）にディオール社のオートクチュールに使用される白地のリボン状のグリフ¹⁰⁾ (7.7cm×2.5 cm) が付いている(図12)。グリフの中央に“Christian Dior”その上に“PRINTEMPS-ÉTÉ1954”下に“PARIS”左端に“MADE IN FRANCE”の文字が黒文字で織り込まれている。右下部分にシリアルナンバー“18270”がスタンプされている。リボンの両端は三角形に折り込まれ、それぞれ3箇所縫ってある。

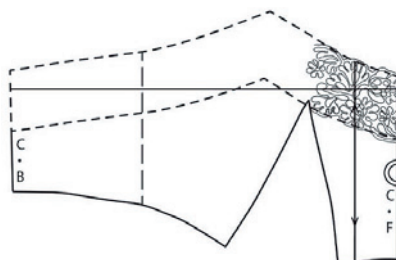


図12 グリフ（表側）

II-2-2) パターンについての調査

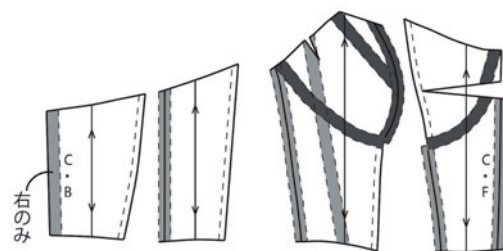
2)-① パターンデータについて

調査により取得したパターンデータは、図13～17のようになる。



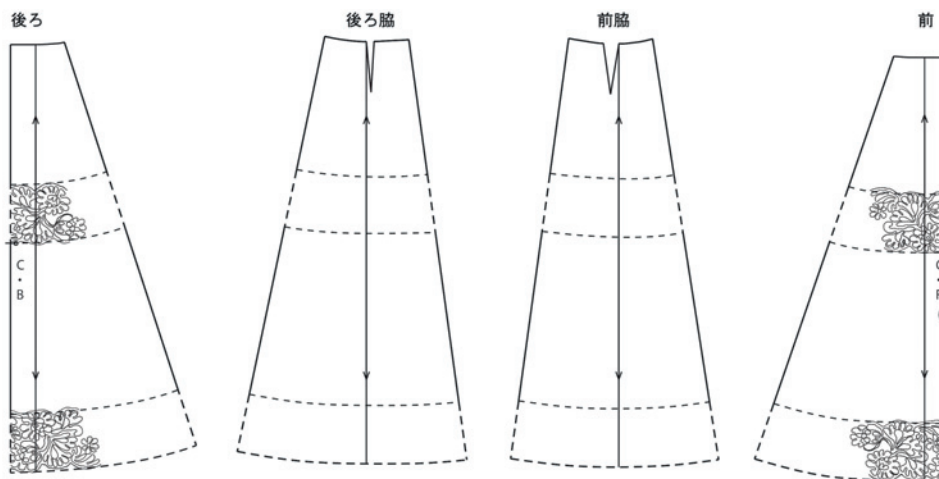
[---] レース付け位置

図13 表身頃パターン



波形状ボーン付け位置 鯨骨ボーン付け位置

図14 ビュスティエパターン



[---] レース付け位置

図15 土台スカート上部パターン

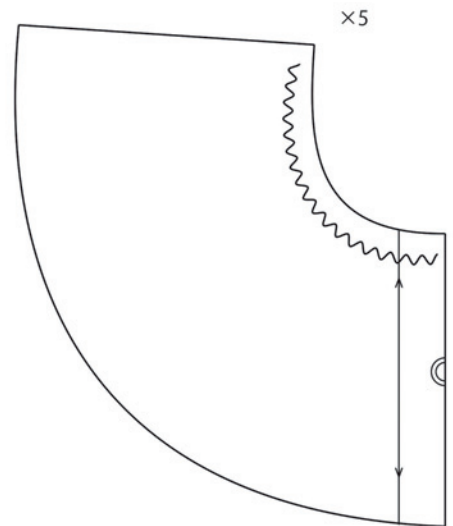


図16 土台スカート下部パターン

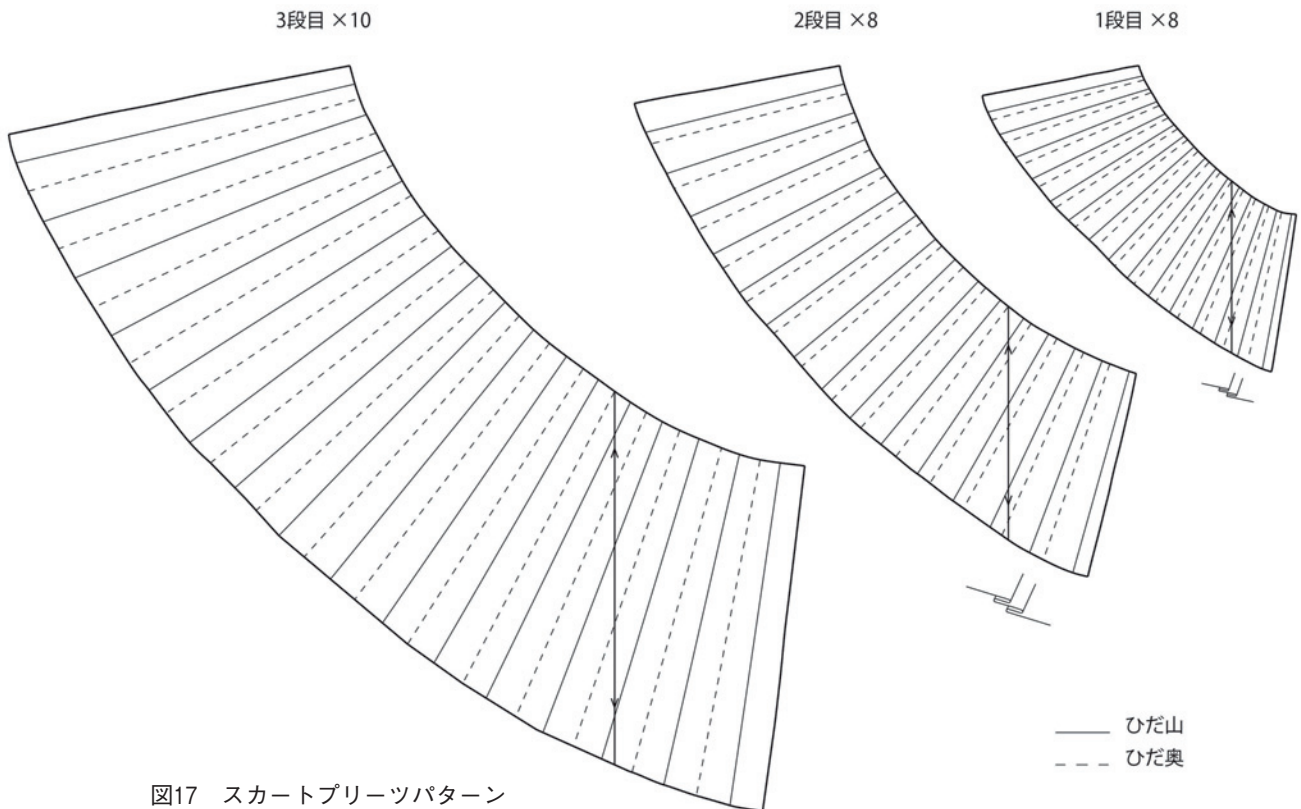


図17 スカートプリーツパターン

2) - ② パターンの特徴

資料のパターンの特徴は以下の通りである (図13～17)。

出来上がり寸法：後ろ中心着丈106cm、バスト89cm、ウエスト65cm、スカート丈91.5cm。

パターン (半身頃) は、表身頃1枚、ビュスティエ4枚 (前中心、前脇、後ろ脇、後ろ中心)、土台スカート上部4枚 (前中心、前脇、後ろ脇、後ろ中心)、土台スカート下部1枚、スカートプリーツ3枚 (1～3段) で構成され、現在、同様のシルエットを作図する

場合に用いるパターンの形状と一致する。

表身頃：前中心から後ろ中心まで切り替え線を入れず、一続きになっている。バストの高さを出すためのダーツ分量がすべて前身頃ウエストダーツに集約している。ダーツのラインはゆるやかなカーブ状だが、ビュスティエの前身頃部分のダーツ量を展開した分量とほぼ一致する (図13)。

ビュスティエ：前後身頃とも中心部分と脇部分に分かれたクラシックなビュスティエの形状である。バストトップを通る前切り替え線は、C.F 側のラインは直線

的であるが、脇側のラインはバストの下端部分で大きく変化し、上方のバスト部分は丸みが強く着用者のバストが豊かな形状であることをイメージさせるラインである。下方の胴部分は直線的である（図14）。
土台スカート：土台スカート上部のパターンは広がりの大きいゴアードスカートの形状である（図15）が、全ての切り替え線をつなぎ合わせると、扇型のサーキュラスカートの形状になる。土台スカート下部のパターンは、扇型の形状のパターンを5枚はぎ合わせ

ている（図16）。

プリーツ：プリーツのパターンは土台スカート下部と同様に扇型の形状である。1段目と2段目は同型のパターンを8枚、3段目は同型のパターンを10枚はぎ合わせている（図17）。

上記で得られたパターンデータを基に、シーチングを用いて組み立て、パターンの確認を行った（図18～20）。



図18 トワフル正面



図19 トワフル側面



図20 トワフル背面

Ⅱ－２－３）縫製方法についての調査

資料の縫製方法は以下の通りである。

身頃：身頃は表身頃の内側にビュスティエを内蔵し、ネックライン、ウエストライン、ファスナー明きは表

身頃とビュスティエと一緒に始末されている。

ストラップレス・ネックラインの始末：身頃表側はネックラインに沿ってレースがまつてある（図21）。表身頃とビュスティエのネックラインは2枚一緒に折り曲げられ、表生地をバイアスに裁断したテープで2枚一緒に始末されている。テープの幅は1.5～2 cm。テープの両端を身頃に手縫いでまつてある（図22）。



図21 ストラップレス・ネックラインに付けられたレース



図22 ストラップレス・ネックラインバイアステープ始末

表身頃のウエストダーツの縫い代は割ってある。

身頃明き始末：身頃の後ろ中心線(表身頃縫い代右4.5cm、左4cm、ビュスティエ縫い代右3.5cm、左2.5cm)は2枚重ねて折り返し、折り端から0.4cm幅でミシンステッチをかけ、ミシン目の位置にファスナーが手縫いで付いている。ファスナーの上端にはかぎホック(1組)が付き、金属製のフラットファスナー(下端まで51cm)がデコルテラインより1cm下がった位置からウエストラインまで手縫いで付いている(図23)。ファスナーの明き止まり位置と先端はテープが巻かれている(図24)。左側身頃側にはビュスティエと共布で作られた持ち出し(3.5cm幅)が1cmの重なりで付いている(図25)。後ろ中心明き部分の表身頃縫い代の端は生地は生地の耳部分を使用されている。



図23 後ろ明きファスナーとスナップ



図24 身頃ファスナー先端テープ(裏)



図25 身頃持ち出し

ビュスティエ：ダーツはミシンで縫い、前中心線上のダーツはミシンの縫い目を中心としてつぶし、ネックライン上のダーツは中心側に片倒してある(図26)。切り替え線はすべてミシンで縫い、縫い代(前切り替え線：2cm、前中心線、脇線、後ろ切り替え線：2.3~2.6cm)は割り、縫い代端はすべて手縫いでかがってある。

ボーン：ビュスティエのパターン(図14)に示すように、バストポイントを通る前切り替え線上のボーンはバストの下端位置で分断され、金属性の波形状ボーン

ン(上方)と鯨骨ボーン(下方)の2種類のボーンが使用されている。波形状ボーン(直径0.1cm、波高約0.9cm、波幅約1.1cm)は前切り替え線上部のほか、バスト膨らみの下端部分、バストポイントからネックラインに繋がる斜めの部分など曲線部分に使用され、カーブの形状によって波型の形状は若干変化している(図27)。そのほかの前中心線、前切り替え線下部、前バスト脇、脇線、後ろ切り替え線、右側後ろ中心線には鯨骨ボーンが使用されている。鯨骨ボーン(幅約0.8cm、厚み約0.15cm)は硬く直線的であり、乾燥しているためしなやかさは無い。波形状ボーンはパイアス地の目テープ(1.4cm)、鯨骨のボーンはタテ地の目テープ(1.5cm)の両端をミシンで袋状に縫った中に入り、ビュスティエの縫い代のある部分は縫い代に、縫い代のない部分は直接生地に手縫いで付いている(図28)。前バスト脇ボーンのみテープの長さよりボーンの長さが約5cm短い。



図26 ビュスティエ内側 波形状ボーンと鯨骨ボーン



図27 波形状ボーン

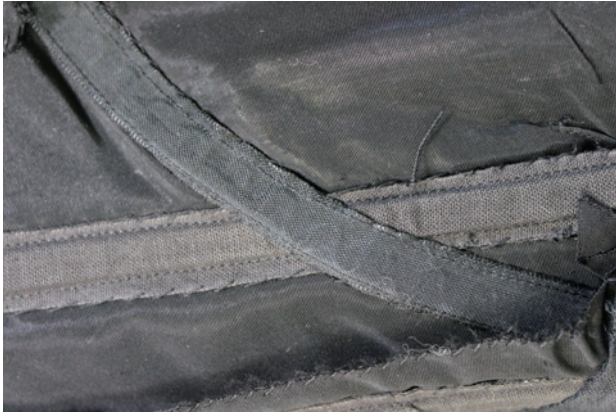


図28 ボーン付け方

ウエスト：ウエストラインは表身頃とビュスティエ、土台スカートとプリーツを一緒にミシンで縫い、身頃側縫い代（約1.3cm）は2枚一緒にかがり、スカート側縫い代（約1.5cm）はプリーツ先が開かないよう縫いとめ、縫い代は割ってある。グログランリボンで作られたインサイドベルトが、縫い目の上に手縫いで付いている（図29）。

インサイドベルト：2.2cm 幅のグログランリボンの先端の縫い代をタテ地テープでくるみ、同時にスプリングホックが1組付いている（図29）。



図29 ウエスト部分とインサイドベルト

スカート：土台スカートは切り替え線、後ろ中心線をミシンで縫い、縫い代（約1cm）は割ってある。土台スカートの上に3段に分割したプリーツを乗せて一体化し、ウエスト始末や明きの始末を一緒にしている。

スカート明き始末：後ろ中心プリーツ奥が明きになっている。明きの長さは26cm、ウエストから約3.5cm 間隔でスナップ（直径0.6cm）が6組付いている（図30）。スナップの上にはスプリングホックが1組付いている。



図30 スカート明き始末

プリーツ：プリーツは同型のパターンで裁断したパーツをミシンで縫い、縫い目はひだ奥になっている。縫い代（約1cm）。1段目プリーツ（上側約0.7cm、下側約1cm）と2段目プリーツ（上側約1cm、下側約1.5cm）はサイドプリーツ（平面プリーツ）で折り、3段目プリーツ（上側約2cm、下側約4cm）はアコーディオンプリーツ（立体プリーツ）で折ってある。1段目の下側、2段目のプリーツの上下、3段目のプリーツの上側は、土台スカート上部に手縫いで付け、その上にレースが付けてある（図31）。



図31 1段目、2段目、3段目プリーツ

1段目、2段目のプリーツはプリーツのひだ奥部分で2～3本おきに土台スカート上部に裏側から斜めしつけでとめてある（図32）。



図32 土台スカート上部裏側 プリーツひだ奥斜めしつけ

3段目のプリーツは、アコーディオンプリーツで折り、付け位置でプリーツが約1.5cm幅になるようにずらしてとめられているため、プリーツに動きが出て立体的な形状になっている（図33）。



図33 3段目プリーツ付け方

レース：3箇所レースは同じ図案のリバーレースが使用されている。ネックラインと2段目と3段目のプリーツ間のレースの方向は同じであるが、1段目と2段目のプリーツ間のレースの方向は逆向きである（図34）。レースの幅はネックラインのレースが7cm幅、スカート部分のレースは2箇所とも7.5cm幅になっている。土台スカートがチュールであるため、レース部分が透けて内部が見える。



図34 1段目、2段目プリーツ間のレース

Ⅱ－2－4）素材についての調査

資料には以下の素材が使用されている（表1）。

表1 素材基礎測定

	生地名	色	素材	密度(本/cm)		厚み (mm)	特徴
				経	緯		
身頃・プリーツ	オーガンザ	黒	シルク	13	15	0.18	ざっくりとして張りがある
ビュスティエ	タフタ	黒	シルク	26	40	0.24	織り密度が高くしっかりしている
スカート土台上部	チュール	黒	ナイロン			0.38	網目直径0.3mm 手触りは硬い
スカート土台下部	チュール	黒	ナイロン			0.21	網目直径0.2mm 手触りはやや硬い

測定機器：マイクロメーター、分解鏡

裾始末：3段目のプリーツの裾は縫い代（約0.2cm）を裏側に折り、約0.1cm幅のミシンで縫っている（図35）。



図35 プリーツ裾始末

土台スカート：土台スカート下部は、同型のパターンで裁断した5枚のチュールをミシンで縫い、縫い代（約1cm）は割ってある。同型の土台スカート下部を2重にして2枚一緒にギャザーを寄せ、3段目プリーツの付け位置で土台スカート上部の裾に手縫いで付いている。土台スカートの下部裾の縫い代は裁ちきりである（図36）。



図36 土台スカート下部裾始末

副資材：波形状ボーン（直径0.1cm、波高約0.9cm、波幅約1.1cm）、鯨骨ボーン（幅約0.8cm、厚み約0.15cm）、ボーンをくるむテープ2種、フラットファスナー（金属51cm）、グログランリボン（2.2cm幅）、スプリングホック、スナップ（直径0.6cm）。

Ⅱ－２－５）調査のまとめと考察

調査の結果、以下のことが確認された。

外観

- ・ビュスティエが内蔵されたストラップレス・ネックラインと豊かなバストの女性らしいシルエットの身頃、3段のプリーツが裾に向かい大きく広がった華やかなサーキュラスカートのシルエットで構成された、ワンピース・ドレススタイルのイヴニング・ドレスである。

- ・スカートのレース部分の裏側は、土台スカートがチュールであり内部が透けて見えることから、本来はペティコートと共に着用されていたものと考えられる。

- ・ビュスティエの左脇線上に付けられた白地リボンに黒文字が織り込まれたグリフは、ディオール社のオートクチュール作品のグリフである。また、グリフに記載された“PRINTEMPS-ÉTÉ1954”という文字から、この作品が1954年春夏シーズンに制作されたものであることが確認できる。

パターン

- ・すべてのパターンが、現在同様のシルエットを作出する場合に用いるパターンの形状と一致する。

- ・前中心から後ろ中心まですべてのパーツを一続きとし、前身頃のダーツをウエストダーツに集約している形状であることと、ビュスティエの胸の丸みの形状から、これらのパターンは立体裁断で作成されたものと考えられる。

- ・スカートのパターンはプリーツを含め、全て扇型形状である。特に土台スカートのパターンを繋げるとサーキュラスカートの形状になるため、資料やトワルのスカートが大きく波のあるシルエットであることが確認できる。

縫製方法

- ・ビュスティエのダーツの縫い代を割らずに処理してあるのは、内側に裏地を付けないために縫い代がほつれることを避けたと考えられる。

- ・ボーンが2種類使われているのは、支える部分の形状によってボーンを使い分けたものとする。波形状ボーンは、ボーンが使用されている箇所の曲線形状に合わせて、個々の波幅が変化することが可能である。このことから前切り替え線上部では胸の丸みを保つように付けられ、胸のふくらみの下端では、現在の

ブラジャーに多く見られるように胸のふくらみを支えるために付けられたと考えられる。また鯨骨ボーンは硬く直線的であるため、ボーンの縦方向に沿って強く直線的に支えることが可能である。しかし鯨骨ボーンは胸の丸みには対応できないため、前切り替え線上には、波形状ボーンと鯨骨ボーンが使用されている。波形状ボーンと鯨骨ボーンは両者の特徴を活かして使い分けてあると考えられる。

- ・スカートのプリーツは1段目と2段目をサイドプリーツで平面的に折り土台スカートに固定することでプリーツの形状が崩れることを防いでいる。3段目をアコーディオンプリーツで立体的に折り、動きがあるように縫製することで、大量のプリーツを使用したスカートに躍動感を与えているものとする。

素材

- ・素材にはシルクが多く使用されている。

- ・表生地オーガンザはざっくり織られ、張りがあり透けているので、デザインに大量のプリーツを使用しても重量感を感じさせない効果を狙ったと考えられる。

- ・ビュスティエに使用されているタフタは織り密度が高いため糸が詰まりしっかきして変形しにくい。そのため1枚であっても着用者の上半身を支え、シルエットを保つことが可能であるとする。

- ・土台スカートに使用されているチュールは、手触りが硬いため、サーキュラスカートのシルエットを保つことが可能である。

以上のことから、本資料の特徴は豊かなバスト形状の女性らしいシルエットを有するイヴニング・ドレスであり、ビュスティエや土台スカートを内蔵することでシルエットを形成し、ドレスの型崩れを防ぐようにパターンや縫製方法、素材を考慮して制作されている。また内蔵されたビュスティエは機能に合わせた2種類のボーンを使用することで、着用者の豊かなバストの形状を支え、より女性らしいシルエットを作り出している。

Ⅲ 制作技術の検証

Ⅲ－１ 試作による検証箇所の検討

前述した調査結果にあるように、この資料の特徴である豊かなバストの女性らしいシルエットを形成するためにはビュスティエが重要な役目を果たしていることは明白である。この点に注目し、ビュスティエのパターンや縫製方法の検討を行った。

図14に示すようにビュスティエのパターンは縦方向の4枚（半身）切り替えで構成されており、この形状

は現在でも一般的に使用される形状である。このパターンのビュスティエは、パターン作成や縫製が比較的容易であるが、シルエットがなだらかでややおとなしい印象である（図37）。このようなパターンのビュスティエでは、前後の切り替え線や脇など縦方向にボーンを入れることが一般的とされている。また、ウエストからネックラインにかけてバスト外脇を通るように、斜め方向にボーンを入れることは、バストが外側にふくらむ事を防ぐ制作方法として、広く使用されている。しかしながら、今回の資料のように、縦方向の切り替えで構成されるビュスティエのパターンにおいて、バストのふくらみの下端に沿うようにボーンを入れることは現在でもほとんど無い。現在ではバストのふくらみを明確に表現するような場合には、図38に示すように前身頃側をカップ部分と胴の部分に分け、カップの下端に沿ってボーンを入れる方法が一般的である。実際、パターン調査をするまで筆者らは、資料のビュスティエはカップ形状に切り替えられたパターンを使用していると考えていた。そこで、縦方向切り替えのパターンのバスト下端部分にボーンを入れるという制作技術に着目し、ボーンを入れることでどのようなシルエットが得られるのか検証を行った。

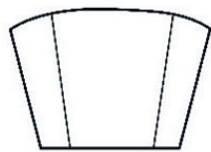


図37 縦切り替えビュスティエ

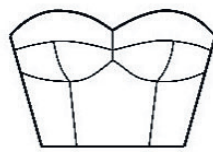


図38 カップ型切り替えビュスティエ

検証1ではバストの下端にボーンを入れることによるシルエットの違いを目視により比較し、その効果の確認を行った。また検証2では検証1の試作に資料と同様に表生地を乗せた場合のシルエットの違いを検証した。

Ⅲ－2 試作の制作方法

検証にはⅡ－2－1) パターンについての調査で取得したビュスティエのパターンデータ(図14)を用い、縫い代は資料と同様に裁断した。

Ⅲ－2－1) 試作素材の選定

生地：ビュスティエの試作には服飾造形においてシルエットなどの形状を確認するときに一般的に用いられるシーチング（綿）を使用した。また、表生地の試作にはネンスーク（綿）を使用した。

使用したシーチング、ネンスークの基礎測定は、以下の通りである（表2）。

表2 使用シーチング、ネンスーク基礎測定1

使用箇所	密度(本/cm)		厚さ(mm)	目付け(g/m ²)
	経	緯		
シーチング	24	29	0.25	109
ネンスーク	18	24	0.2	67

測定機器：マイクロメーター、分解鏡、電子デジタル天秤

資料に使用されているタフタはオートクチュールに多く見られる裏打ちをしていないが、表1にあるように織り密度が高いため糸が詰まりしっかりと変形しにくい生地である。そのためシーチングだけでは同様の形状を作る事は難しいと考え、接着芯を貼り補強した。資料は非破壊調査のため、タフタの計測条件に限られる事から、数種類の接着芯を同一の条件でシーチングに貼り手触りを比較した。その結果、日東紡ダンレーヌ接着芯 Dan-Reine R222を選定した。R222は無撚糸で経緯同じ太さの糸の平織である（表3）。

表3 使用シーチング基礎測定2

使用箇所	密度(本/cm)		厚さ(mm)	目付け(g/m ²)
	経	緯		
シーチング+R222	24	29	0.4	177.5

測定機器：マイクロメーター、分解鏡、電子デジタル天秤

なお芯の接着に関しては、直線式接着プレス HP-900LF (S) を使用し、温度上下125℃、圧力0.3 Mpa、接着時間15秒の条件で接着した。

ボーン：現在では資料に使用されている波形状ボーンや鯨骨ボーンは手に入らないため、試作には使用されている波形状ボーンに近い硬さの直径0.1cmの針金を資料と同様の形状の波型に曲げたもの（図39）と鯨骨ボーンに類似した板状のプラスチックボーン A（幅0.7cm、厚み0.15cm）（図40）を選定し使用した。



図39 波形状ボーン



図40 プラスチックボーンA

Ⅲ－2－2) ボーン位置の検討

検証では、バストの下端にボーンを入れることによるシルエットの違いを比較するため、前後身頃に入れ

られたボーンの位置を、①資料と同様バスト下端位置にボーンを入れる場合（図41）、②バスト下端のボーン

ンをはずした場合（図42）に設定し、ボディに着装させ、目視により比較を行うこととした。

検証1 及び2 ビュスティエ内部構造



図41 ①資料と同様バスト下端位置にボーンを入れる場合



図42 ②バスト下端のボーンをはずした場合

Ⅲ－3 結果および考察

検証結果は、以下の通りである。

Ⅲ－3－1） 検証1 ボーンの有無によるシルエットの比較

① 資料と同様バスト下端位置にボーンを入れる場合



図43 正面



図44 側面



図45 斜め

①はどの角度から見てもバストの下端のラインが明確である。特に側面ではバストの膨らみの部分と胴体の部分の境界がはっきり確認できる（図43～45）。

② バスト下端のボーンをはずした場合



図46 正面



図47 側面



図48 斜め

②は胸の下端ラインが①に比べ不明確である。前切り替え線上に入るボーンがバストの下端の位置で分断されているため、正面、側面からバストと胴の境界はある程度確認できるが、全体的にバスト下端のラインは不明確である（図46～48）。

試作①と②の正面、側面、斜めの各写真を比較すると以下のことが検証できた。

①はバストの下端のラインが明確である。②は前切り替え線上に入るボーンがバストの下端の位置で分断されているため、バストと胴の境界はある程度確認できるが、全体的にバスト下端のラインは不明確である。バストの下端のボーンの有無により、シルエットに明確な差が出る理由としては、バスト下端位置に

ボーンが入る事により、着用者の体にボーンが面として密着することでバストのふくらみと胴との境界線が生じ、バスト下端のエッジがはっきりと意識できるためと考えられる。

次に検証1で使用した試作にそれぞれ表身頃を乗せた場合、検証1と同様の結果が得られるか確認を行った。

検証2 検証1の試作に表身頃を乗せた場合のボーンの有無によるシルエットの比較

③ 資料と同様バスト下端位置にボーンを入れる場合

④ バスト下端のボーンをはずした場合



図49 側面



図50 斜め



図51 側面



図52 斜め

③は検証1-①で明確であった胸の下端の位置に入ったボーンの位置は確認できないが、明らかにバストと胴の境界が確認できる（図49、50）。④は検証1-②のシルエットよりもバストポイントから続くラインが更になだらかになり、胸と胴の境界が不明確である（図51、52）。

試作③と④の側面、斜めの各写真を比較すると以下のことが検証できた。

③は検証1-①と同じように明らかにバストと胴の境界が確認できるが、④はバストポイントから続くラインが検証1-②より更になだらかになり、胸と胴の境が不明確である。検証2においても検証1と同様に、バストの下端に入ったボーンにより、シルエットに差が出るという結果が得られた。これらの結果から、バストの下端位置にボーンを入れることによって、バスト部分に切り替えのないパターンであっても、バストと胴の部分を明確に分けるシルエットを形成することが可能となる。また、そのシルエットは、ビュスティエのシルエットに沿わせるように表生地を重ねたとしても、シルエットに変化を生じないということが確認できた。

Ⅲ-3-2) 検証3 市販されている素材を使用して作成した場合のボーンの有無によるシルエットの比較

検証1、2の結果をもとに、新たに検証3として現在の制作技術として活用する方法を検討した。

検証1、2により縦方向の切り替えで構成されるビュスティエのパターンのバスト下端位置にボーンを入れることで、バストと胴の境界線に明確なシルエットが形成される事が確認された。そのことにより、現在市販されている素材を使用し、同様の結果が得られるのであれば、パターンや縫製技術が未熟な制作者であっても比較的容易にシルエットを作る事が可能となるのではないかと仮定し検証を行った。資料が制作された当時は波形状ボーンと鯨骨ボーンを使用していたが、現在ではどちらのボーンも入手する事は不可能である。現在市販されているボーンの中から、縦方向

の切り替えて構成されるパターンに多く使用されるプラスチックボーン（図53）を選び、鯨骨ボーンの代わりとした。また、資料ではバストポイントを通る前切り替え線上のボーンが、波形状ボーンと鯨骨ボーンの2種類が使用されていた。これは鯨骨ボーンが硬く曲線になじまないためと考えられる。鯨骨ボーンの代わりとしたプラスチックボーン B（幅0.8cm、厚み0.1cm）は、縫製が容易であり、熱や力を加えることで変形し、バストのふくらみに対応した曲線が可能である。さらにバスト下端部分でボーンを分断することで、ボーンの断面が着用者に当たり着心地が悪くなることを考慮し、ボーンはバスト下端部分で分断せずに強く折り曲げ、1本の続いたボーンで作成した。また波形状ボーンとして金属製ソフトボーン（幅0.4cm、厚み0.1cm）（図54）を選定した。金属製ソフトボーンは、波形状ボーンより細く、小さなリングが連なった形状である。リングの連結が柔らかいためバスト下端の曲線に沿うことが可能である。また、市販されているブラジャーボーン（図55）は、長さがあり、また着用者の体に面として密着するには細すぎる事から、使用には不適切と考えた。

ぎる事から、使用には不適切と考えた。

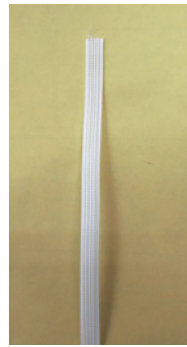


図53 プラスチックボーン B



図54 金属製ソフトボーン

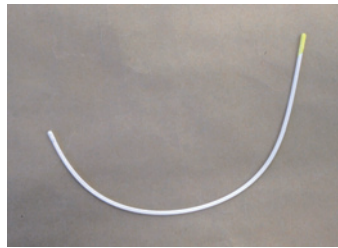


図55 ブラジャーボーン

検証3 市販されている素材を使用して作成した場合のビュスティエ内部構造



図56 ⑤資料と同様バスト下端位置にボーンを入れる場合



図57 ⑥バスト下端のボーンをはずした場合

⑤ 資料と同じ位置にボーンを入れた場合



図58 正面



図59 側面



図60 斜め

⑤は前切り替え線上のボーンをバスト下端部分で分断していないが、バスト下端に沿ってボーンが入ることにより検証1-①と同様にバストと胴の境界線が明確である(図58~60)。

⑥バスト下端のボーンをはずした場合



図61 正面



図62 側面



図63 斜め

⑥は前切り替え線上ボーンがバスト下端部分で分断していないため、検証1-②バスト下端のボーンをはずした場合と比較しても、よりバスト下端の位置が不明確である。特に側面から見ても、バストポイントから胴になだらかにつながっている(図61~63)。

正面、側面、斜めの各写真を比較すると以下のことが検証できた。

検証3では資料と異なり、前切り替え線上のボーンをバスト下端部分で分断していないため、バスト部分と胴部分が1本のボーンで続いている状態である。⑤ではバスト下端にボーンが入ることにより検証1-①の結果と同様にバストと胴の境界線がはっきり確認できる。また、バスト下端に入れたボーンの幅がオリジナル資料の波形状ボーンより細いため、見た目の印象はすっきりとしている。⑥では資料でボーンが分断されていた前切り替え線上のバスト下端位置でしっかりとボーンを折り曲げたが、検証1-②と比較しても、バスト下端の位置が不明確である。ビュスティアにボーンが縫い付けられることによりその形状が不明確になり、シルエット全体のメリハリがなくなったことが原因と考えられる。

以上の検証結果から、縦方向に切り替えられたビュスティアにおいて、バストの下端部分にボーンを入れることでバスト部分と胴部分に境界線が生じ、バストの下端部分にボーンが入っていない場合と比較すると、明らかにシルエットに差が出ることが確認できた。

以上の理由により、資料のバスト下端のボーンは、バスト部分と胴部分のシルエットを明確に作るために必要であり、適した位置に入っていることが確認できた。また、この制作技術は現在一般的に市販されている素材を使用しても同様の結果を得ることが確認できた。

Ⅳ まとめ

調査・検証の結果、以下の項目が明らかになった。

資料調査結果

本資料の特徴は豊かなバスト形状の女性らしいシルエットを有するイヴニング・ドレスであり、ビュスティアや土台スカートを内蔵することでシルエットを形成し、ドレスの型崩れを防ぐようにパターンや縫製方法、素材を考慮して制作されている。また内蔵されたビュスティアは機能に合わせた2種類のボーンを使用することで着用者の豊かなバストの形状を支え、より女性らしいシルエットを作り出している。

試作検証結果

・縦方向に切り替えられたビュスティアのパターンであっても、バストの下端位置にボーンを入れることによって、ビュスティアが着用者の体に密着することでバストと胴部分を明確に分けるシルエットを形成することが可能となる。また、そのシルエットは、ビュスティアのシルエットに沿わせるように表生地を重ねても、同様のシルエットを形成する事が確認できた。以上の技術は、制作技術の経験値を補うために、記録として蓄積すべき技術であると考えられる。

また、この制作技術は現在一般的に市販されている素材を使用しても同様の結果を得る事ができることが確認できた。

V おわりに

本研究は、クリスチャン・ディオールの1950年代イブニング・ドレスの制作技術に着目し、詳細な調査、試作による検証を行い、「形を作る」ために必要とされる技術を検証し記録を蓄積することが目的である。資料調査を重ねるたびに、実際に調査、検証することが、文献で知識を得ることだけでは得られなかった制作技術の意味を真に理解することにつながるものと考えている。

今回の造形研究では、ビュスティエに入れられた1本のボーンの制作技術の意味を検証することで、現在でも十分に活用する事ができる技術を見出すことができた。ビュスティエを美しいシルエットで作ることは技術的に難しい事である。しかし今回の造形研究により、未熟な制作者にとっても比較的容易にそのシルエットを作り出せる方法が明らかになったことは、学生を指導する上でも有意義であり、改めて1950年代の技術を記録し蓄積することが、将来の制作技術を支えることにつながると確認できた。

今後も「形を作る」ために必要とされる制作技術を、将来に受け継ぐべきものとして検証し、更なる造形研究を進めると共に、これまでの研究により蓄積されたパリ・オートクチュールの制作技術を活かす方法の可能性についても、研究課題として取り組んでいきたい。

註

- 1) 安部智子 林綾美 平野紗江 森淳子, 「パリ・モードにおける服飾造形研究—1950年前後制作デイドレスの造形—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 13』, 2015, pp. 14—30.
- 2) 安部智子 水野真由美 森淳子 田口雅子, 「パリ・モードにおける服飾造形研究2—1959年前後制作デイ・ドレスの造形—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 14』, 2016, pp. 1—15.
- 3) 安部智子 水野真由美 森淳子 林綾美 平野紗江, 「パリ・モードにおける服飾造形研究3—1957年前後制作デイ・ドレスの造形—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 15』, 2017, pp. 1—13.
- 4) 杉野芳子編, 『改定第4版 図解服飾用語事典』, 学校法人杉野学園, 1993, p. 38.
- 5) クリスチャン・ディオール著, 上田安子・穴山昂子共訳『一流デザイナーになるまで』(復刻版),

牧歌舎, 2008, p. 96.

- 6) クリスチャン・ディオール著, 朝吹登水子訳, 『私は流行をつくる』, 新潮社, 1953, p. 69.
- 7) マリー＝フランス・ポシュナ著, 高橋洋一訳, 『クリスチャン・ディオール』, 講談社インターナショナル株式会社, 1997, p. 369.
- 8) 註1) に同じ, p. 16.
- 9) 「吊り紐のないカミソール・ネックラインのことで、肩、腕、胸、背の上部を露出したもの。イブニング・ドレスに多くとり入れられる。」註4) に同じ, p. 113.
- 10) 安部智子 森淳子, 「ヴィンテージドレスにおける制作年代の推定方法に関する考察—Christian Dior のデイ・ドレス—」『服飾文化学会誌 Journal of Costume and Textile 〈論文編〉 Vol. 16No. 1 2015』, 服飾文化学会, 2016, pp. 49—60.

図版出典

- 図1 *L' officiel 1000 Modèles No. 81*, Les Éditions Jalou, France, 2008, p. 4.
- 図2 Fraçoise Giroud and Sacha Van Dorssen, *Dior Christian Dior 1905—1957*, Editions Du Regard, Paris, 2006, p. 169.
- 図3 *Dior Catwalk The Collection, 1947—2017*, Yale University Press, 2017, p. 72.
- 図4 図1に同じ, p. 49.

参考文献

- ・シャルロット・ゼーリング編, 川西和世 森川智子訳, 『FASHION 20世紀のファッションデザイナー 1900—1999』, KÖNEMANN, 2001.
- ・ブリジット・キーナン著, 金子桂子訳, 『クリスチャン・ディオール 1947—1957 Dior in Vogue』, 文化出版局, 1988.
- ・シャルロット・シンクレア著, 和田侑子訳, 『VOGUE ON クリスチャン・ディオール』, ガイアブックス, 2013.
- ・南静著, 『パリ・モードの200年 第二次世界大戦から現代まで』, 文化出版局, 1990.
- ・杉野芳子著, 『ディオール』, 日本書房, 1959.
- ・Claire Wilcox (Ed.), *The Golden Age of Couture Paris and London 1947—57*, V&A Publications, London, 2007.
- ・Mark Shaw, *Dior Glamour*, Rizzoli International Publications, NY, 2013.

- ・ Richart Martin and Harold Koda, *Christian Dior*, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1996.
- ・ Esmeralda de Rethy & Jean-louis Perreau, *Monsieur Dior et nous 1947–1957*, ANTHESE, 1999, France.
- ・ Françoise Giroud, *Dior Christian Dior 1905–1957*, Editions Du REGARD, 2006, Paris.
- ・ Adelheid Rasche (Ed.), *Christian Dior and Germany, 1947 to 1957*, Arnoldsche, Berlin, 2007.
- ・ 鈴木美和子他著,『平成19年度～21年度 私立大学 学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター研究報告「現代衣装の原点を探る」ーウォルト作品の復元』, 杉野服飾大学, 2010.